

2019. 10. 1

畑 啓之

新井用水（しんゆようすい）は川の流れと出会ったときには逆サイフォンで乗り切る

新井用水という江戸時代に開発された農業用水があります。加古川市南部や播磨町へ農業用水を届けています。この用水ができる前には干ばつの被害が大きかったそうです。

新井用水 <http://www.hyogo-c.ed.jp/~ryohoku-es/koukusyukai/sinniyousui.htm>

江戸時代の初めは、加古川下流の平野部でしか農を営むことができませんでした。平野部西のほんの少し高くなった所でさえ、水を引くことは容易ではありません。ため池や、台地縁端に湧き出る湧水に頼るしかありませんでした。

誰もが途方にくれるしかなかった用水事情を、打破しようと試みた人物がいます。新井用水の生みの親、今里傳兵衛（いまざとでんべえ）です。

新井用水について記されている「播州賀古新疏水道記」や「新井水道記」によると、「1654年の夏、2ヶ月にわたって雨が降らず、稲は枯れ、飢え死にするものが続出し・・・」（意訳）とあります。一度干ばつが起こると、見るも無残な有様だったようです。（続く）

高低差の殆どない農地に 14km にもおよぶ水路を引きました。この水路は途中で4つの川を横切ります。1草谷川、2曇川、3白ケ池川、4喜瀬川です。現代の工法では川の上に水橋を通すところです。たとえば、淡河川から稲美町へと水を運ぶ淡河疏水（おうごすい）の三木・志染サイフォンは有名です。サイフォンと言いながら逆サイフォンとなっています。

新井用水の開削時期はこの淡河疏水よりもはるかに前の江戸時代です。4つの川を乗り切るのにやはり逆サイフォンを使っています。当時の技術では水橋を架けるよりも水管を川底に通すほうが易しかったようです。

大庄屋・今里伝兵衛が命を賭けて開削した新井用水は今でも多くの田に水を供給しています。9月29日に加古川大堰からこの新井用水を播磨町の大池までたどりました。神野、日岡の田は実に見事に稲穂が実っていました。しかし、加古川市の南部に入ると一挙に住宅地が増えます。それでも、ともかくは喜瀬川までは新井用水に沿って歩くことができました。喜瀬川を超た播磨町では完全に住宅地となり、残念ながらその流路をたどることはできていません。今里伝兵衛の生きた地元は今や住宅地です。時代が変われば変わるものと実感した散歩となりました。

# 新井用水『水のめぐみ』

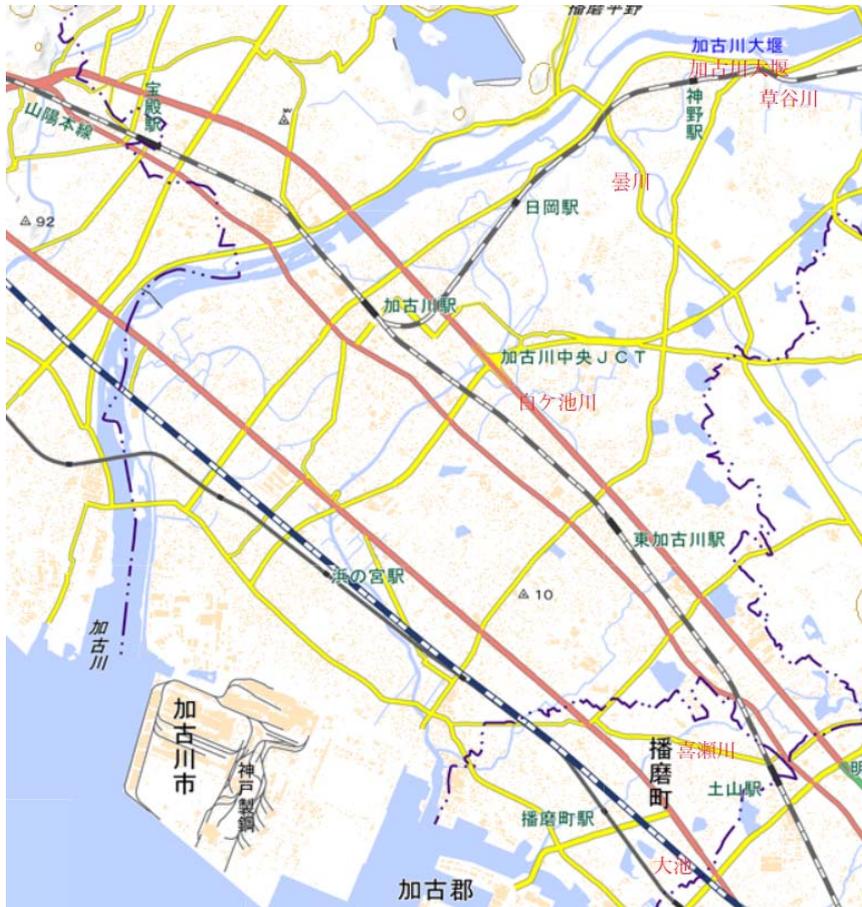


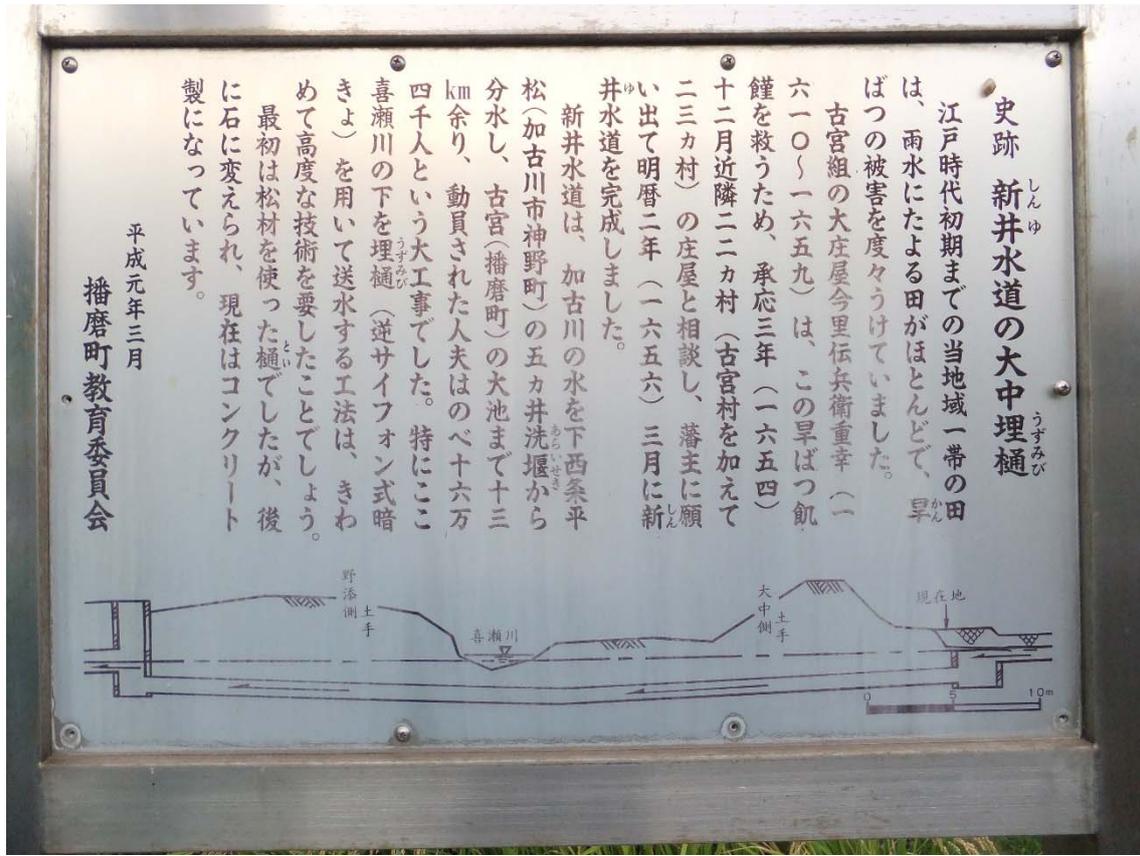
新井(しんゆ)用水は加古川市八幡町からの加古川大堰から播磨町古宮の大池まで農地へ水を送る約14kmの水路です。新井用水の歴史は古く、1656年播磨町古宮の大庄屋今里傳兵衛が中心となって計画され、のべ16万4千人の人の努力により開通しました。

途中には河川を渡るサイホンや岩盤を削った水路などがあり、当時としては高度な土木技術が使われています。また、全線を通じて水路の高低差がほとんどなく曲がりなどを巧みに利用して水を通してしています。開通後350年以上の長きにわたり、何度も改修を重ねながら、現在でも地域の農業用水の要として豊かな水のめぐみを与え続けています。

また、新井用水は、ホタルやカワセミなど加古川のめぐみを町並みに送る貴重な自然空間です。新井用水を上流から下流から歩けば約半日、季節毎ゆっくりめぐれば350年の水のめぐみを体験できるうおい空間です。

新井用水に親しむ会・新井水利組合連合会  
平成21年5月





以下の写真で、逆サイフォンがどのようなものか、それぞれの川の様子、逆サイフォンの入り口、そして出口の写真を示しました。1草谷川、2曇川、3白ヶ池川、4喜瀬川です。





加古川市の南部と播磨町は、宅地に埋め尽くされた。

